

(3) 環境と安全に配慮した農業の推進

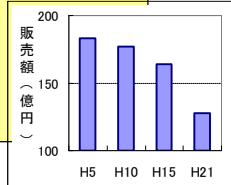
つまもの野菜における安全・安心への取り組み

～高品質、安定供給を部会みんなで！～

東三河農林水産事務所農業改良普及課

現状・背景

- 産地規模は全国一である
(5組織19生産部会400戸、販売額約120億円)
- 多種多様な品目が生産されている
(大葉、食用ぎく、花穂、ハーブ類など50品目以上)
- 害虫の被害に困っている
(特にハダニ、アザミウマなど)
- 販売額が減少傾向である
(業務需要、単価の低迷)



問題や課題の必要性

栽培面

- 使用できる農薬(登録農薬)が少ない
- 化学合成農薬だけでは十分な防除が難しい

販売面

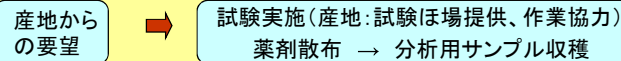
- 消費ニーズ(安全・安心面)に対応した取組が十分でない

- 1 農薬登録拡大の推進
- 2 IPMの推進
- 3 GAP 導入の推進

普及活動と成果

1 農薬登録拡大の推進

取組:各品目で農薬登録に必要な作物残留試験等を実施

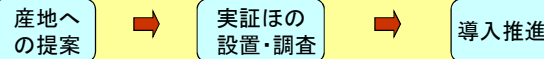


活動:農総試と産地の間で調整役となり、取組を支援

7年間(H17~23年)で34作物147剤の登録農薬が増えた

2 IPMの推進

取組:ハダニの天敵(カブリダニ)利用を中心とした防除方法を検討

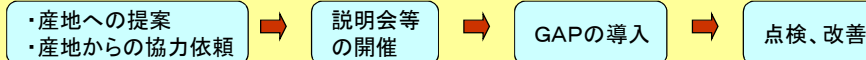


活動:生産者、関係機関と実証ほを設置・調査し、その結果を共有

大葉、食用ぎくで天敵の効果を確認でき、普及しつつある

3 GAP導入の推進

取組:生産者の意識向上と消費ニーズへの対応としてGAP導入を支援



活動:生産部会、関係機関と取組を検討し、説明会の開催及び導入後の点検、改善を支援

大葉を中心に5組織12生産部会(364戸)で導入された



まとめ

- 登録農薬数の増加
- IPMの実践
- GAPの取り組み

生産者側 : 化学合成農薬の削減と生産安定が図られる
: 品質に対する意識向上、消費者の信頼が獲得できる

消費者側 : 安全・安心な愛知のつまもの野菜が供給される

組織力で実践 トマト黄化葉巻病の総合防除

東三河農林水産事務所田原農業改良普及課

産地の概要

愛知県は、温暖な気候と大消費地が近いという立地条件に恵まれて、野菜生産全国4位(平成22年)の大産地を形成している。

トマト(ミニトマト、加エトマトを含む)の産出額は154億円で全国2位(平成22年)となっている。

田原市のトマト生産は、栽培面積131ha(冬春トマト)で市町村別では県内で最も大きく、全国でも3位の産地である。

トマト黄化葉巻病とは

トマト黄化葉巻病は、ウイルスにより発生する重要病害で、関東以西の34都府県(平成21年)で発生。愛知県では平成8年に初めて発生し、その後急速に各産地へ拡大。

- 病徴：新葉が黄色くなって巻込み、萎縮する。発病すると治すことができず、収量が大幅に減少する。
- 伝染：成虫の体長が0.8mmのタバコナジラミが媒介し、一旦ウイルスを保有するとその虫は死ぬまで病気を伝播する。
- 防除：防除には保毒したコナジラミの侵入や増殖を防ぐことが最も重要。



トマト黄化葉巻病の症状



タバコナジラミと防虫ネット

病害の発生と対応策の推進

<病害の発生>

平成16年にはじめて多発。

→発生面積1.3ha、発生割合7.9%

前年まで発生がほとんどなかったため、防除対策が不十分。

<総合防除の実践>

ウイルス源となる感染したトマトの除去。タバコナジラミの防除と拡散の防止。

<効果的な防除の実践>

防除効果を高めるため、地域のトマト生産者が一体となって防除を実施。

トマト生産組織の支部(4~8戸)単位で対策会議を設置。

○地域での発生状況の確認

病害の発生場所と発生程度を生産者が地図に記入し、地域内の発生状況を確認。

○防除対策の検討

対策会議毎に研究会を開催。地域の実情に応じた防除対策を作成。

→防除対策

- ・トマト無策付け期間の設定
- ・栽培施設周辺や地域の環境整備
- ・地域一斉防除
- ・個別対策の実践

○実施状況の確認

対策の実施状況を役員が巡回して確認。

地域対策の支援と成果

<トマト無策付け期間の設定>

地域内の保毒したタバコナジラミを減らすため、夏場の3週間はトマトの作付けをやめることを合意。トマト栽培終了時期の申し合わせ。

<施設周辺の環境整備>

タバコナジラミの定着防止のため、施設周囲の除草を実施。→90%の施設は良好な環境を維持。

<地域全体の環境整備>

屋外へのタバコナジラミの分散防止のため、栽培終了時の施設蒸し込み処理を実施。

JAと協力してリーフレットを作成し、家庭菜園で感染したトマトの適正な処分を全戸にお願い。

<地域一斉防除>

育苗期及び生育初期を中心とした薬剤防除を実施。

一斉防除が必要となった時には、連絡網により防除日を連絡する体制を整備。



施設周辺のマルチによる除草



役員による巡回

個別対策の支援と成果

<0.4mm目合いの防虫ネットの設置>

体長0.8mmと非常に小さなタバコナジラミの侵入防止。→施設の開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを82%の施設に設置。

<黄色粘着板の設置>

施設に侵入したタバコナジラミの捕殺。→黄色粘着板を10aに300枚、地域で26,200枚設置。また、捕殺状況に応じて適期に防除。

<薬剤による防除>

育苗期及び定植時に粒剤による防除。→生育初期の感染防止が実現。

<発病株の除去>

栽培施設内の発病株は即座に除去。→施設内での拡大防止の徹底。

<家庭内での情報の共有>

女性を対象とした研修会を実施。→家庭内での知識や情報の共有化。



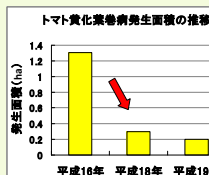
開口部(天窓)へのネットの設置



黄色粘着板の設置

成果

病害の発生を1/4まで抑制！この取組をモデルに他地域に波及。



防除成功のポイント

○トマト黄化葉巻病の防除は地域ぐるみで実践

全員参加で実態の把握や対策を作成することで、作付け期間の調整など利害に関わる対策も可能。

○組織的な取組で対策の確実な実行

生産組織の支部単位で対策を取りまとめ、対策の実施状況や病害の発生状況を役員が巡回、確認することで確実に対策が実施。

天敵を活かした茶の環境保全型農業の推進

豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課

背景

- 対象者：豊田茶業組合15名、54haのてん茶（抹茶の原料）産地。
- 17.2haが有機栽培。環境保全型農業に対する意識高い。
- 平成年度にチャトゲコナジラミ、クワシロカイガラムシが大発生。
土着天敵が多い有機栽培茶園では発生は極めて少ない。
→再び害虫を大発生させないために土着天敵を活用できないか。



事前調査

①調査の容易な害虫チャトゲコナジラミと天敵シルベストリコバチを茶園ごとに調査、散布した農薬を聞き取り

②リーダー農家Aさんが取組んでいたチャノミドリヒメヨコバイの耕種的防除を調査

目標

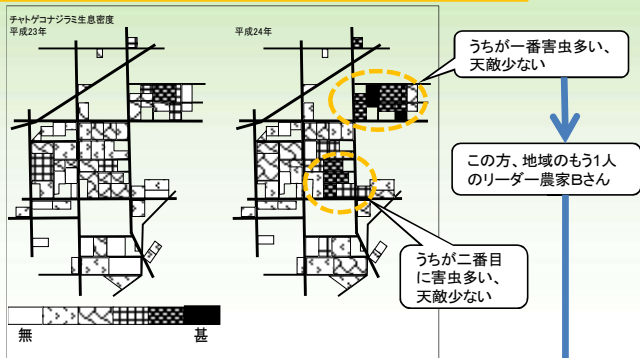
- 平成25年度に天敵温存栽培技術指針が合意され、平成26年度には実践される。

普及指導活動

- 事前調査を踏まえ、天敵温存栽培技術指針を作成
平成25年8月の研修会で実践するよう指導

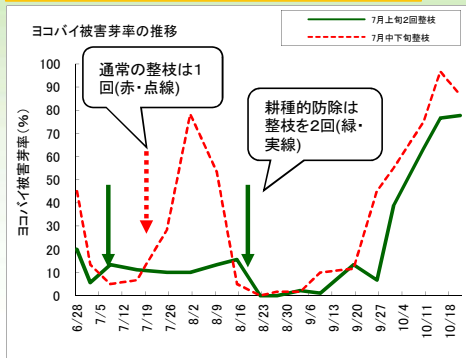
ポイント①天敵に影響の少ない農薬の選択

害虫マップで各生産者の現状をわかりやすく説明



ポイント②チャノミドリヒメヨコバイを耕種的防除

2回整枝の耕種的防除の効果を強調



対象者の反応

- 「農薬は天敵にやさしいもので」
- 「農薬管理がわかってしまう」
- 「リーダー農家Aさんをまねて耕種的防除をやってみる」

- リーダー農家Bさん
平成25年8月の研修会終了直後
「害虫が一番多いと公表されたことが不満」
→11月の茶園巡回
「天敵に影響の大きい農薬は使わない」に変化



成果

- 平成26年度には、対象の15名全員が、
①天敵に影響の少ない農薬の選択
②チャノミドリヒメヨコバイの耕種的防除、
どちらかに取り組むこととなった。

成果の上がった要因

- 害虫マップでわかりやすく説明
- リーダー農家が味方に
- 環境保全型農業に対する意識が高い産地

【愛知県】